



「宇宙モデリング」の概要について

◆提案代表者

東京藝術大学美術学部 教授 米林 雄一(よねばやし ゆういち)

◆実施概要

<ISS・きぼうでの実施>

宇宙飛行士が紙粘土(約200g)を手びねりにより、2体の「ひとがた」を制作。

・1体目:微小重力下での進化を髣髴させる手足の細長い「ひとがた」

・2体目:微小重力空間で重さを表現する土偶タイプの「ひとがた」

制作した「ひとがた」2体はSTS-126ミッションにて地上に回収予定。

(平成20年11月下旬頃予定)



手びねりモデリング

<地上の活動>

子どもたちが未来の人間を想像しながら手びねりによる「ひとがた」を制作。
(提案代表者が展開)

◆目的

宇宙からの視点による地球観と、地球からの宇宙観。それぞれの発想を比較し、また組み合わせることにより、人間についてのイメージが広がるとともに創造の領域も広がることを目指している。



子どもたちによる手びねり

◆このテーマに対する米林教授のことば

人類による「表現」。それは、有史以前からすでに始まっていました。明日の食べ物を手に入れたらという願いをこめて壁に牛や馬の絵を描き、呪術的な目的なのか、ヒトの手形なども洞窟の壁画として残っています。

また、粘土を用いて自らの姿をつくり、そこに特別な意味を持たせていたと考えられています。

太古から未来につながる表現の素晴らしさ。「きぼう」という未来に続く「場」をその価値を選び、子どもたちとのコミュニケーションを通じて、その価値を創造し、探求を続けます。



米林 雄一教授